



TITLE:

紅蓮教と哥老會

AUTHOR(S):

野口, 鐵郎

CITATION:

野口, 鐵郎. 紅蓮教と哥老會. 東洋史研究 1983, 42(3): 418-441

ISSUE DATE:

1983-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153916>

RIGHT:

紅蓮教と哥老會

は し が き

野 口 鐵 郎

近代への胎動がしだいに活潑化してくる一九世紀なかば以後の中國には、同世紀初頭のいわゆる嘉慶白蓮教の亂にみられる性向とは異なつたそれをもつ宗教セクトの活動が顯在した。すでに市古宙三・小島晉治などによって述べられたよう⁽¹⁾な、宗教セクトと天地會などのいわゆる會黨との結合による反權力闘争の構築という傾向の存在がそれである。市古のいう青蓮教と天地會との、小島のいう「齋匪」⁽²⁾と天地會との結合の姿は、淺井紀によつて、道光二五年破案の青蓮教に関する論考のなかで、さらに確められた。⁽³⁾また、同治年間の江西省とその周邊に存在した紅白黃教が、哥老會と不可分であつたことも、すでに明らかである。⁽⁴⁾これらが、いずれも時の權力側からはつねに彈壓されるものであつたことは、いうまでもない。

以上は、それ自身のうちには舊い體質を具備していても、その企圖するところが別にあつたかも知れないとはいえ、會黨との連攜、もしくは會黨との一體性を保ちつつ、近代への動輪を民衆サイドにおいて轉じようとしたと結果的に評價してよいような、いわば先進的な役割を果たした祕密宗教セクトである。しかし他方、これらとは對照的に、自らの宗教性を慈善的活動と民衆の日常的健康維持のための方途の基礎に据えることによつて、官憲の彈壓を免れようとした、眞空教のような宗教セクトもあつた。⁽⁵⁾

本稿でとり上げようとする紅蓮教は、上に述べたうちの前者のタイプに属する秘密宗教セクトである。それはどのような宗教であつたか、先行するどのような宗教結社に宗教的に連なるのか、それと會黨との繋がりはどのようなであつたのか。當面、このような課題をたててこれに答えつつ、近代化過程におけるこの種の秘密宗教の擔つた歴史的役割にまで及ぶことができれば幸いである。

一

同治五年十一月七日に保甲の局紳からの報に接した江西省義寧知州李寅清は、差役を率い、保甲局員の紳董と協同して管内を巡查する一方、州屬の銅鼓營の兵を調して彈壓・緝捕の行動をおこした。李寅清の報告をうけた江西巡撫劉坤一も、同時に袁州に駐防する遊擊朱長發に長字營の兵五〇〇を率いさせて、李寅清に合流させた。江西省北西部の地方官憲による剿討行動の對象は、行動の契機となつた局紳の密稟に述べられた、義寧州清涼山に聚集している紅蓮教セクトであつた。

これが、同治五年末の義寧州における紅蓮教摘發の發端である。その顛末は、翌同治六年三月二十八日附で劉坤一の手によつて「拏辦義甯教匪片」⁽⁶⁾として中央に報告され、これに依據した記録が、『大清穆宗實錄』卷二〇三、同治六年五月丁卯條にある。劉坤一の筆をなぞりつつ、しばらくこの事件をあとづけてみよう。

ひそかに勢力を蓄えていた紅蓮教徒は、このとし一〇月二五日に州城攻撃の時期を約束したが、約束の十一月八日の夜になつて城内の守備の嚴重なことをみて約一月間の延期を議した。州城の守りが固められていたのは、すでに「初八九進城」という謠言の流布に氣づいた局紳の報告によつて、知州李寅清の對應策が施されていたからである。そしてさきに記したような官憲側の先制行動の結果として、一月初旬に、李觀芬・朱以沈・帥世江・賴青雲・姚富常・陳惟堯・馬廉本・李吉芬・李炳芬・陳進恆・帥世湖・帥經春の一二名が捕えられた。うち姚富常は他の逮捕者があつたときの訊問に備

えてしばらく監候とすることを除き、他の一名はいずれも「地に就きて正法し、梟首して衆に示す」の刑に處せられた。續いて陳心廣以下計一八名の逮捕があったが、かれらはいずれも微罪であるとして、「枷杖保釋」に處せられた。

以上が、義寧州紅蓮教事件の概要である。同治一〇年刊の『義寧州志』は、卷一四、武備志、武事においてこの事件を極めて簡単に記し、李寅清が團勇を率いてこれに當り、保甲を擧げて「匪十餘名」を捕斬した、というにとどまる。これが、この時期のこの地方の紅蓮教の絡まる事件の最初であった。

これだけの逮捕者を出しながら、義寧州に紅蓮教をもちこんだと考えられる人々は、捕えられていない。劉坤一はそこで、鄰接する湖南・湖北の兩省に咨を發して、「數を悉くして就獲し、法に盡くして懲辦して、以て根株を絶ちて地方を靖ん」ぜんことを期することを述べて、この「義甯片」を終えている。義寧州に紅蓮教を導入した人物は、楊煥章・曾幗才である、と「義甯片」はいう。しかし、それがどの地方からもちこまれたかは、問われていない。しかも、曾幗才の名は同片においてはその一箇所を除いては記されず、「在逃首夥要犯」としても、楊煥章の名がとどめられているのみである。

楊煥章の名は、同治六年六月初六日附の劉坤一の「劉陽教匪竄擾當經兵團撲滅摺」⁽⁷⁾に續いて見ることができる。ここでは、かれは「義甯州逃匪」と肩書きされている。この「劉陽摺」は、同治六年なかばの江西省上高縣・萬載縣・湖南省瀏陽縣の三縣における紅蓮教摘發事件と、それら相互の關連を記している。以下、その概要を紹介する。

楊煥章は、同治六年四月なかばまでは、上高縣西源などのところで紅蓮教の布教活動を行っていたようである。かれに従って入教した黃石秀・胡附子・黃新發・黃啓生などは、四月一八日に暴動をおこしたところ、上高知縣王維新の摘發にあい、捕えられて瑞州府に解送された。⁽⁸⁾

同じころ、知縣江璧の總指揮による紅蓮教摘發が、袁州營都司江清の應援をうけて萬載縣でも行なわれ、黎碧升・邱啓發・黃冬發が逮捕され、かれらの自供によって、「大頭目」は義寧州の楊姓であることが明らかにされた。⁽⁹⁾ 義寧州の楊姓

が楊煥章であろうことは、疑いがないとしてよい。したがって楊煥章の宗教的勢威は、義寧州・上高縣・萬載縣で高かったのである。

上高縣・萬載縣の事件の捜査が進行している段階で、約千餘人の紅蓮教徒が湖南省瀏陽縣姜盧垸に聚り、李某の房屋を燒き、男女を殺害し、瀏陽の官兵に追われて鄰省の萬載縣小源地方に逃入する、という事件があった。⁽¹⁰⁾ さきの萬載縣の事件で出動していた萬載知縣江璧・袁州營都司江清は、劉坤一によって派遣された遊擊朱長發とともに、團練の力を借りながら、五月一二・一三の兩日にわたって大橋・白良・朱家垸などのところで剿討行動を展開し、「首逆」姜本致をはじめ一六人の「匪黨」を逮捕した。この行動の結果、僅かに數十人が「四散奔匿」したほか、すべて官軍のために殲滅された、と「瀏陽摺」は伝え、恐らくこのときに萬載縣を逃れて義寧州に至った盧恩珠など三人も、知州李寅清によって捕えられたことが附記される。⁽¹¹⁾

瀏陽縣から萬載縣にかけての事件については、同治六年五月から湖南巡撫の任にあった劉岷によっても中央に報告されている。同治六年五月の「撲滅湘鄉會匪並擊散瀏陽齋匪摺」⁽¹²⁾の後半がそれである。但し、ここでは楊煥章・姜本致以下、劉坤一の「瀏陽摺」に載せられている人名のいずれにも言及されてはおらず、かつ、紅蓮教の名のかわりにそれを「齋匪」と表現しており、さらに、萬載縣における動向はいっさい述べられていない。劉岷の瀏陽縣における事件に關する記述は、劉坤一のそれに比べて、細かい地名や團紳の姓名などを詳記するに過ぎない。ただ、この事件に絡まる首魁の名を「生擒匪黨」の自供によって唐姓のものであると語る點が、劉坤一の「瀏陽摺」にはみえないところであって、紅蓮教もしくは「齋匪」に係わる記述も、總じて簡である。劉岷の「瀏陽齋匪摺」によった『大清穆宗實錄』の記載は、この事件を哥老會によるものと判斷しているようである。⁽¹³⁾

同治六年四月・五月の紅蓮教事件は、以上のように、省を異にする江西省萬載縣・上高縣・義寧州と湖南省瀏陽縣とにまたがって展開された。劉坤一の意見を俟つまでもなく、これらが前年末の義寧州における事件と同じ系統に連なるもの

であることは明らかである。⁽¹⁴⁾ 但し、楊煥章の名は、被逮捕者のなかにみいだせない。同治七年閏四月二〇日附の劉坤一の「准誤入紅白黃教鄉愚自新諭」⁽¹⁵⁾において、楊煥章は「在逃首犯」と位置づけられているので、かれは恐らく萬載縣においても瀏陽縣においても、法網をくぐることに成功したのであろう。

劉坤一は、もう一つの紅蓮教に係わる事件を、中央に報告している。それは同治六年末、もしくは翌七年初の日附をもっていたであろうと思われる「拏辦奉新教匪片」⁽¹⁶⁾の前半に述べられる。それは、江西省奉新知縣徐廷琛の稟報に基づいたもので、事件の概要は以下の如くである。

同治六年九月二四日夜、四〇人餘の「匪徒」は奉新縣上富地方の西坪書院を襲い、團局的軍器・銀兩を奪って一名を殺し、續いて同地方の街森・太振の二店舗を襲って、銀錢・貨物を奪って二名を殺した。このために官の追及をうけ、郷團に追われて、張繼生・王義發・羅金崙・劉羅生・孫受山・田必開・彭志禮の七人が逮捕された。南昌知府吳祖昌の訊問に對して、張繼生・王義發は「在逃之義甯州人」楊萬盛に従って紅蓮教に入教した、と自供した。

ここに記される楊萬盛がかつての楊煥章であるという記述は、いままでの所見のうちにはないが、同一人でないという根據もない。しかし、楊萬盛は曾幗才を「教頭」として張繼生らに紹介し、劫奪の實際行動の指揮をかれに委ねていることや、曾幗才・楊萬盛の二人は劉坤一によって「均しく、義甯州の教匪の滋事案の内の、網を漏れし要犯に係わる」と把握されていることやからみると、楊萬盛は楊煥章と同一人である、という可能性が強い。かりに同一人でないとしても、奉新縣の紅蓮教が義甯州から移入されたものであることは、認めてよい。

ところが、このときに紅蓮教徒として逮捕されたものの宗教系列に、もう一つの系統があった。捕えられた羅金崙の自供によると、かれは「在逃之臨江府人」陳繼端を師として「入教喫齋」した、とされているのがそれである。但し、陳繼端の名は、これ以外の史料にみいだせないこと、紅蓮教という名をかれに絡んでは明記せずに、單に「入教喫齋」という言い方をしていること、の二つは、同一集團内に二つの宗教が流れこみ、共同行動をとった、とも考えさせる材料であつ

て、奉新縣の紅蓮教に二つの流れがあった、とは考えないほうがよいのかも知れない。明らかなことは、義寧州から移入された紅蓮教を受容したものが、奉新縣にも存在した、ということである。

劉坤一が「奉新片」の後半部分において、湖南省瀏陽縣・醴陵縣のこととして報告する内容は、劉岷の「瀏陽醴陵摺」にも述べられる⁽¹⁷⁾。但し、劉坤一の瀏陽縣・醴陵縣の事件の報告には、劉岷が記載している曾國才・楊煥章の名はみえず、二人の別々の摺に共通して名をみせるのは黃發香ただひとりである。しかし、劉岷の上奏に、かれらが「未獲」の「紅教巨首」とされていることに依據すれば、同治六年一月末から翌七年一月末にかけて、江西省に西接する湖南省瀏陽・醴陵の二縣にも、楊煥章・曾國才の指導する紅蓮教の根が張られていた、と知り得る。

曾國才の名は、劉坤一の「紅白黃教諭」に「在逃首犯」とされてはいるものの、同治『瀏陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難は、同治六年一二月の條に續けて、「是の年、江西省、誘いて曾國才を捕え、誅に伏さしむるに至る」といい、劉岷の同治七年一月の日附をもつ「擒獲瀏陽等縣會匪懲辦片」⁽²⁰⁾では、このとし七月二〇日に江西省分宜縣で曾國才を捕えたといっているので、その年月に齟齬があるとはいえず、官憲に逮捕された、とみてよからう。しかし、楊煥章については、諸書に逮捕のことを示す記事をみいだし得ない。しかも、江西・湖南の省境を挟むこの地帯において、これ以後かれの名を聞かない。

紅蓮教の名は、同治六年末以後しばらく記録上にあらわれないが、同治九年三月以後において、江西省新昌縣におこった製紙労働者の賃金引下げ反對のストライキに絡んで、再び史料上に姿をあらわす。この事件は、劉坤一の同治九年六月七日附の「新昌民教滋事獲犯懲辦摺」⁽²¹⁾に詳しい。その概要を、紅蓮教の摘發を中心として紹介すれば、次の如くである。⁽²²⁾

新昌縣天寶郷の團局紳董であった歲貢生就職訓導の鄒壽朋は、同地方の特産である紙の製造業を営んでいた。その作業は、紙工八人で一廠を構成し、別に一人の包頭がこれらを取りまとめていた。勞賃は、前年にとりきめることになっていた。ところが、同治九年三月、鄒壽朋は製品の賣れゆき不振を理由に、各廠戸とはかつて工賃を一人一日銀二分ずつ減じ

ようとした。これを契機に、工匠の停工がおこったのである。包頭であった李世魁・李世昆・何良才・溫怡萬は紅蓮教徒であり、かつ、かれらのなかには義寧州を原籍とするものも含まれていたことから、かれらは紅蓮教の「頭目」楊長受・劉洗明などを邀え、これを機に「糾衆起事」し、紳富を襲い、縣城を撞くことを企てた。楊長受らは黨與のものを義寧州に派遣して衆を糾合させ、四月一三日に新昌縣潭山で「企事」することにした。こうしたなかで、義寧州では知州王維新によって、新昌縣にこうとしていた紅蓮教徒謝景發が逮捕され、ことの企てを自供した。他方、李世魁等は、停工で食に困ったことから、四月一〇日に約二〇〇人の紙工とともに斜巷や鄭家村の廠戸を襲撃し、穀米を搬出するなどの實力行動を行なった。しかし、翌一日から團勇による追捕がはじまり、一〇名餘が殺され、一〇名餘が逮捕されて即日處刑されたものもあった。紅蓮教徒であった四名の包頭も逮捕され、二名は在監中に病死し、他は「殺斃棄死」された。楊長受・劉洗明は、紙工たちが殺されても敢えて厥起しないのをみて逃れたが、間もなく劉洗明は捕えられて病死した。

以上が、新昌縣の事件のあらましである。ここでは、紅蓮教が紙工のストライキを契機として、より大規模な暴動をおこすことを企てたが、紙廠の工人と「教匪」とが結ば「巨案」を醸すであろうという判断による官憲側の先制によって、鎮壓されて終ったことがうかがえる。この新昌縣の事件にも、さきにあげたいくつかの紅蓮教の關與した事件と同様に、もはや楊煥章も曾幗才もいないにも拘らず、義寧州が係わっている。義寧州は、この祕密宗教セクトの本據であったのであろうか。十分にそのことを明らかにし得たであろう同時代編刊の同治『義寧州志』は、官撰書の通例であらうか、知りたいことには、觸れていない。

二

紅蓮教は、どんな宗教であったか。これを解く手がかりは、劉坤一が残しているのみである。かれが義寧州の事件を處理した中央への報告である「義甯片」によって、紅蓮教の一面を知ることができるのである。嚴密に言えば、それは義寧

州紅蓮教の特殊な姿であって、すべての地域の紅蓮教に共通するとはいえないのかも知れないが、以下にそれを紹介してみよう。依據するところは、註記しない限り、「義甯片」である。

この宗教には、特定の經卷がなかった。劉坤一は、「其の教、並びに經卷なし」と記す。特定の經卷をもたない祕密宗教は、珍しくない。たとえば、清茶門教のようなかなり有力なセクトにあっても、ある部分においては經卷を所持せず、教理ないしその類いのものは、口傳によって伝えられたことが報告されている。²⁴ 清茶門教の場合には、当初は『三教應劫總觀通書』などの經卷を所持していたものの、度重なる弾壓のなかで焼毀せられたまま、もしくは自らの手でそれを放擲したまま、それ以後は口傳に頼っていたのであるが、紅蓮教の場合は、當初からそれを所持していたふしはうかがえない。しかし、かれらは集會に際して口稱する文言をもっていた。他の祕密宗教セクトでこのような口稱句をもっているとき、それは多く念佛とか、降神のための稱名とかの類いであつた。紅蓮教では、二跪六叩頭して「一箇團團六合青、三三二二緊隨身、陰陽造得漢成事、三年會下三年春」の四句を念稱した。「三八二二」が「洪」字の析字であることは知り得る。あるいは第一句も析字に類する隱語であるかも知れない。しかし、總じてこの四句は不可解である。「洪」字の析字をもつことは、さきに紹介した同治六年五月の瀏陽縣・萬載縣における事件を、清朝官憲が『大清穆宗實錄』において、哥老會による事件である、と斷じていることとともに、紅蓮教が哥老會と密接に繋がることを教えてくれるようである。なお、このことについては、のちに詳論する。

集會などの宗教的行事は、毎月三・六・九の日に喫齋すること、朔・望に上香することを主としていたようで、その間に香・燈を燒點し、水飯を供したことはもちろんである。この型式は、他の祕密宗教セクトと相似である。また、毎月九日の喫齋日をもったことから、かれらには「齋匪」という呼び名も與えられていた。劉崐の上奏は、かれらをおしなべて「齋匪」と呼ぶ。その教徒に「齋匪」という名を與えられる祕密宗教は、一般に齋教ともいわれ、羅教の流れをひくものが多く、この當時に近い當該地域には青蓮教セクトが活躍していた。紅蓮教が「齋匪」と呼ばれる背景には、それが羅

教の別稱であつたからとも考えられるが、それにしては羅教の特徴的殘影がほとんど全く見當らない。羅教系セクトと紅蓮教との混淆があつたからと考えることが、當面最も妥當なようである。

この祕密宗教セクトには、香・燈の奉獻の對象となる崇拜神格の存在をうかがう史料の記録がない。羅祖も、彌勒佛も、無生老母も姿をみせない。僅かに義寧州の李觀芬に、ある種の神權的要素があつたことについて語られるのみである。²⁴⁹身體にある疵痕や黒子などを貴相であるとして自己のカリスマ性の高揚に利用することや、寶劍や天書を與えられたとして自己の權威化に繋げることは、從來の祕密宗教セクトに前例をみいだすことが難しくない。大衆を自己にひきつける時の、舊いタイプの宗教セクトの常套手段であるとしてよく、紅蓮教李觀芬の場合も例外ではない。

紅蓮教では、免劫の符籙を所持していた。文盲の木匠に道士の符籙であると詐つて雕刻させた印を紅紙に捺したもので、印面は八卦號團であつたという。これが免劫の護符とされたのであり、同時にこれがいわゆる「歛錢」の手段であつたことは、いうまでもない。「紅蓮教、久しからずして事を起こさん。得て號團の印條を有する者は、身家を保つ可し」が、護符售賣のときの宣傳文句であつた。この文句に呼應するかにように、「初八九進城」の謠言が流布されれば、「愚民、多く惑わされる所となり、錢を出だして買受す」ことになる。

免劫の護符が賣られた、ということとは、紅蓮教では劫の到來が宣傳されていたことを示すであらう。²⁵⁰「初八九進城」の内包するところも、劫の一種と考えられる。到來する劫を免れるために、紅蓮教への入教が勧められたのである。但し、劫災到來の宣傳と避劫の護符の販賣とが、「歛錢」のための目的行爲であつたことは、すでに當時の官憲には看破されていた。²⁵¹

紅蓮教の利益は、免劫のみにとどまらなかつた。「或いは誤りて誘われ、脅かさるるに係わつ」て紅蓮教徒になつたものがいたことはともかくとして、「或いは挾仇せられて誣攀し」たもののほか、紙條號團を購買することによって「保家」しようとしたものや、「病に因りて誤り信じ」たものの、「貪利」²⁵²という文言で入教したものもあつた。「因病誤信」のもの

や「貪利」のものがいた、ということは、この宗教セクトの宣傳内容に、現實的・功利的な願望滿足の部分が少なかつたことをものを語っている。

以上が、紅蓮教の宗教に關して、現在知り得るすべてである。紅蓮教は特定の神格や經卷を所持しなかったが、それ以前における祕密宗教セクトに傳承されたような信仰形態を繼承し、とくに羅教系のセクトに接近したそれをもっていたようである、と觀察し得た。但し、紅蓮教がどの地方でいつ創唱されたか、創始者はだれか、などのことについては未詳である。

楊煥章・曾幗才によつて宣傳・編成された紅蓮教セクトは、義寧州を中心として、次のような宗教的ヒエラルキーをもつていた。これは宗教的階層であると同時に、そこにおかれた職制の名稱からもわかるように、集團の軍事的、ないし武裝的階層でもあつたと考えられる。

楊煥章・曾幗才が「師」といわれて別格であつたことを除いて、義寧州においては、李觀芬が「統管内盤」、朱以洸が「統管外盤」とされていた。「内盤」・「外盤」という責任分擔を示す職號は、道光八年に破案となつた河南・陝西にまたがる青蓮教セクトの組織内の職號と同じである。「内盤」とは、さきに引用した劉坤一の「義甯片」に「李觀芬を奉じて主となす」と記され、また、かれが貴相をもとに自らをカリスマ的地位におこうとしたことなどから明らかなように、宗教セクト内を統轄する役割に對して與えられた職號であらう。また、「外盤」とは、朱以洸が、これもさきに記したように、八卦號團を捺印した護符を作製して販賣したことに示されるように、宗教の對外的宣布と金錢收入とを掌る職號であつた。

この兩者の下に、儒教の徳目でもある仁・義・禮・智・信を號とする五箇集團が編成された。義寧州にはそのうちの仁字號・義字號・信字號の三號がおかれた。禮字號は湖南省瀏陽縣に、智字號は江西省萬載縣に設置され、ために義寧州の教徒は「是を以て、該犯等、未だ該二號の各各の夥黨の姓名をも知らず」と記録されるように、相互に連繫はなく、僅かに「師」の楊煥章などにおいてのみ繫がついていたようである。このような組織の構成方法の採用には、祕密保持という意

味と、官憲に追われた際の逃亡先の確保という配慮とがこめられていたのかも知れない。但し、劉坤一・劉岷の瀏陽縣・萬載縣の事件に係わる上奏、及び當該地方の地志などの關連史料には、禮字號・智字號に係わる記載はなく、後述する萬載縣の場合のごく一部を除いて、禮・智の二號内の組織などは不明である。

義寧州における三つの號には、おのおの「正帥」・「副帥」・「四協官」・「將軍」・「哨長」・「百長」などがあって、三人の「正帥」と一人の「將軍」の姓名を知ることができる。³¹⁾また劉坤一の「新昌摺」に記されている義寧州で捕縛された謝景發について、「充當百長」という記述をみることができるが、これら以外の「副帥」・「四協官」・「哨長」については、それを肩書きとする具體的な姓名をみいだし得ない。

義寧州以外の事例については、以下の如くである。萬載縣には、劉忠潰が「帥」として存在したようである。但し、これが智字號に係わるのか、さらに正・副のいずれであるのかなどについては、一切記されていない。また劉坤一の「瀏陽摺」によると、萬載縣の事件において捕縛されたもののなかに、「千總」の「偽職」をうけたとされる黎碧升・邱啓發の二人の名がみえる。これらが智字號内の職號であるとすれば、義寧州の三號内の列記された職號以外に、萬載縣における組織独自の職號があったことになる。あるいは、「千總」も義寧州における紅蓮教の職號の一つとしてあったのかも知れないが、判然としない。さらに、劉坤一の「奉新片」は、曾幗才に「教頭」、楊萬盛に「師」と肩書きし、かれらによって入教したものに「將軍」・「提督糧官」の職號が與えられていたことと、それらに「偽封」された人名を記録している。³²⁾奉新縣の紅蓮教セクトには、「提督糧官」という職號もあった、と知り得る。奉新縣に關しては、次のことも知り得る。同治六年九月の奉新縣の事件で、僅か七名しか逮捕できなかった知縣徐廷琛が「摘去頂戴」に處せられたことはかつて述べたが、かれの頂戴が回復されたのは、かれがその後において、奉新・新昌の縣境の弔馬嶺で張大樹・羅克柏の二人を逮捕したからである。七人の逮捕は頂戴摘去で、それに二人を増すとそれを回復するというのは、この二人がかなりの重要人物であったことによると思われる。即ち、「齋匪教匪摺」によると、二人はともに「本地教首」であり、羅克柏は「正頭頂」、

張大樹は「副頭頂」の「偽職」を曾幟才からうけていたのである。この報告によれば、奉新縣における紅蓮教の責任者は張大樹・羅克柏の二人であって、ここでは義寧州のような「内盤」・「外盤」ではなく、正・副の「頭頂」という名稱でその地位が示されていたのであり、その下にさきに記した「將軍」・「提督糧官」などが設けられていた、と知り得るのである。

ところで、瀏陽縣には紅蓮教組織の一部である禮字號がおかれていた、と「義甯片」に記されていた。しかし、同じ瀏陽一の「瀏陽摺」など、瀏陽縣における紅蓮教事件を記した記録のいずれにも、禮字號という文字はみえてもその内容などの記載はない。そのみならず、禮字號に絡まるものとは異なる組織編制のあったことが、「瀏陽摺」には伝えられている。即ち、義寧州の楊姓を「大頭目」とする瀏陽縣姜盧塢地方の紅蓮教セクトは、さきに紹介した如く、瀏陽を追われるや鄰接の江西省萬載縣に竄入し、萬載知縣江璧らによって擒獲された。このときに捕えられてやがて凌遲處死になった姜本致について、かれは瀏陽縣姜盧塢の人で「紅蓮教主」であり、「姜吉祥等四十餘人と與に、溫・良・恭・儉・讓の五營を編立す。姜本致は良字營に係わり、姜吉祥は恭字營に係わる」と記録されているのがそれである。この五營84においては、義寧州における五號の場合と同じく、良・恭の二營以外については、「其餘の三營の頭目の姓名は、省記する能わず」とあって、その姓名すら姜本致・姜吉祥に伝えられていなかったようである。これも、祕密保持のための方途であったろうか。そして、義寧州の事件の仁・義・信の三號と同じく、瀏陽縣の事件は良・恭の二營の手によって企圖・發動されている。あるいは溫・儉・讓の三營は存在しなかったのか、あるいは五號の場合と同じく、三營は他の州縣に置かれていたのか、この間のことを語る史料はない。しかし、現地の人をいわば本地の紅蓮教首の位置におくこと、かれをその一員としてみることができるのである。また、五營の名稱である溫・良・恭・儉・讓は、道光期青蓮教セクトにおけるいわゆる五德の名稱であったことは、同治期紅蓮教に對する道光期青蓮教の影響、ないし要素の混入をうかがわせるに足る。

號と營との違いは、次のようにも考えられる。即ち、五つの號の組織を記した「義甯片」の記述は、紅蓮教の宗教とその周邊のことがらに多くの筆を費していた。これに對して、五つの營の組織を記した「瀏陽摺」は、姜本致を「紅蓮教首」といい、「教匪」を撲滅したことを報告することを主旨としながら、紅蓮教の宗教性については僅かな記録さえもみせず、かえって「聚衆滋事」・「謀逆」などの反亂様相を示す文字が散見する。このことを踏まえていえば、號の稱謂は紅蓮教の宗教セクトとしての編成を示すものであり、營の稱謂はあるいはそれと重なって組織された紅蓮教の武力行動の場合の編成であつた、ともいえる。このことを明らかに示す史料を缺くが、それぞれの記述法とその内容とから、そのように判斷し得るのである。しかし、號の内部に「將軍」などの職號のあることは、この判斷を強く推すことをためらわせる。

同治九年の新昌縣における紙工のストライキを煽り、これに乗じた事件においては、「新昌摺」によれば、劉洗明・楊長受とともに「紅蓮教頭目」とされ、その下に紙廠の包頭などとして紅蓮教徒が屬していたようである。官憲による鎮壓後の在監中に病死した四人を含む計一〇人の被逮捕者は、「籍は義甯・新昌、及び湖南の平江等の州縣に隸す」と述べられていること、新昌縣の事件に絡んで義甯州で逮捕された謝景發が「百長」に充てられていたことなどは、あるいは「頭目」や「百長」などの稱をもつものは義甯州を原籍とする人々であつた可能性を示している。もしそうであるとすれば、新昌縣の紙工ストライキは、同治六年段階の破案以後、「網を漏るること有年、此次、復た不軌を謀」つた「紅蓮教頭目」劉洗明が、何良才・溫怡萬などを紙廠に包頭として送り込むことによって、「不軌」の時機をうかがっていた結果として將來された、という臆測もできるようである。しかし、奉新縣においては、前述の義甯州や瀏陽縣などにおけるような號、または營に類いする紅蓮教セクトの組織を、積極的にみいだすことはできない。

三

以上において、曾幟才・楊煥章を領袖とする紅蓮教セクトの同治中葉における活動をほぼ觀察し終えた。この觀察の過

程で、紅蓮教は江西省義寧州を中心として、周鄰の上高縣・萬載縣・奉新縣・新昌縣、湖南省の瀏陽縣・醴陵縣にまたがって存在していたことを知った。同治『萬載縣志』卷一四、武事によれば、さらに宜春縣にもその力は及んでいたようであるし、³⁷⁾「新昌摺」によれば、當該事件での被逮捕者のなかには湖南省平江縣に隸籍するものもいた、と傳えられる。また、臨江府の人によって保持されていたことを示す記録も存在した。江西省北西部と湖南省北東部にまたがって、即ち袁北・湘北の地に、紅蓮教の勢力が存在したことを知り得たのである。

ところで、曾幘才という人物は、さきに明らかにしたように、紅白黃教を總理する人物であった。³⁸⁾また、劉崐の「瀏陽醴陵摺」は、「紅教巨首」として「未獲」のものの中に楊煥章・黃發香とともに曾幘才の名を記す。曾幘才は紅白黃教のなかでも、とくに紅教に係わる人物であったようであることとともに、紅蓮教が紅教ともいわれるものであったことを知り得る。

紅教は、同治『贛州府志』卷三三、武事が「紅教の劫殺凶悍を合して、以て亂をなすなり」といい、劉崐の「瀏陽醴陵摺」が「紅教は、則ち醜類を集め、戈矛を備え、以て指揮を聽す」というように、³⁹⁾武力行爲を主とする集團であり、そのための大衆動員を試み、促す集團であった。そして、さきにみたように、黃教・白教と一體不可分の集團であった。このような紅教を、したがって紅蓮教を、湖南省における哥老會の別稱として位置づけるのが、劉崐である。かれは紅教・黃教・白教などを「湖南會匪」の異名とし、すべて白蓮の餘習を踵ぐものである、という意見を述べている。⁴⁰⁾かれが開陳する意見のなかには、必ずしも首肯し得ないことがらをも含んではいるが、紅教などが哥老會の異稱であると述べることを參酌すれば、いままでの行論において紅蓮教と記してきたことは、すべて紅教と置き換えることができるし、さらに、すべて哥老會と言い換えることが可能になる。しかも湘北・袁北の地は、まさしく哥老會の一般的性格の一つとして描寫される「山に據る」⁴¹⁾という表現にふさわしい地であった。

この可能性は、次の三點によってより高いものとなろう。曾幘才・楊煥章などを「紅教巨首」と述べた劉崐の「瀏陽醴

陵摺」が、同じ肩書きで呼ぶものの一人である張以喜、即ち張善成は、同治六年二月以降に萬載縣で捕えられたが、かれは姜守東という人物とともにこのとしの夏に「謀作亂」したと同治『劉陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難は傳え、その割註に、「守東は哥老會、以喜は紅教なり」と記される。即ち、紅教の張以喜、即ち張善成は哥老會と鄰接、もしくは一體であったのである。これが第一點である。第二に、劉岷の「劉陽懲辦片」は、會幟才を「會匪渠魁」と呼び、「疊次に、江・楚の地方に在りて、衆を糾あつせて亂を稱う」と述べる。そして劉岷は、一連の上奏において「會匪」の呼稱を用いるとき、それはとくに湖南省の哥老會を指すことを常としている。即ち、會幟才は紅蓮教の「師」であり、紅教の「巨首」であり、紅白黃教の「總理」であり、そして哥老會の「渠魁」なのであった。さらに第三點は、さきに記した紅蓮教の宗教的部分にみられたように、紅蓮教徒の口念する四句のなかには、哥老會に特有の隱語があつたことである。こうして、紅蓮教は哥老會の別の謂であつた、という可能性は極めて高いものとなる。さらに附け加えるならば、劉岷が報告する關連の文書には、「盟を結びて拜會し、生死を共にせんことを誓う」、「結びて弟兄となり、生死を共にせんことを誓う」という、哥老會の形成に絡まる常套句が、しばしば散見されるのである。

哥老會の形成の詳細についてはいまは觸れないが、湖南省北東部における情況について、劉岷は、太平天国に際して出兵した兵勇のなかで哥老會が形成されはじめた、と論じ、天京の陷落以後、官兵の營丁は裁撤・回籍されたが、營丁の獷悍の性はすでに馴致し難くなつており、哥老會に入會した者は身を保つことができなくなつていたので、「故に、東南の大局既に定まりて、而して湖南の隱患方に長ぜんとす」と、湖南の特殊的な立場へと論を移す。湖南の事情に關してはさらにことばを繼いで、「査べたるに、湖南の哥弟會黨の人、數多にして紀すべからず」といい、そのなかには、「功保を積みて、二・三・四品の官階に至る家」、「餘資ありて、遽かには異志を萌すに至らざる者」、「江・湖に貿易して心に劫掠を憂うれば、名を會中に掛けて、冀うに資・命を保全するを以てし、初めは別して詭謀あるに非ざる者」もいる、と述べて湖南省哥老會の勢力の背景を説明する。こうした湖南省哥老會が湘鄉・湘潭・劉陽等の湖南省北東部一帯にわたつて、

「屢次に事を起こすは、則ち又た端倪の顯露せるものなり」と劉岷が論ずるような活動を行なった。⁽⁴⁷⁾ 同治六年一月二六・二七日に醴陵縣で事件をおこし、⁽⁴⁸⁾ 同治九年九月には醴陵・萍鄉・萍潭の交界地に騒動を試みたなどは、その一例である。

近代への轉換を民衆サイドに立って推進させていこうとしたともいえる哥老會のような會黨が、その初動に近い段階で、ことさらに祕密宗教セクトの形態をとったのは何故であらうか。この發問に對する基本的な回答の一つは、會黨と宗教セクトを支える胎盤が共通であつたことにあるのではなからうか。劉岷はすでに、湖南哥老會の形成の契機として、さきに見たように、太平天国の鎮壓にあたつた勇丁の裁撤後に問題のあることを指摘している。かれがいうように、かれらが「犢悍の性、已に馴え難きに屬す」であるといふことは、かれらはいわば原籍の家郷に再びうけいられ難いことをいうのであり、同じ事情は、同治『贛州府志』卷三三、武事がいう太平天国倒壞後の「漏網者」についてもいい得る。かれらは、いわゆる「亡命」として生きるための方策を、何ものかに求めざるを得なかつたのである。こうした情況に迫込まれた人々が祕密的な宗教セクトの潜在的勢力であつたことは、前近代以來の傾向であつた。そして恐らく、會黨側はこうした人々を、はじめは宗教として誘い、しだいに武力行使の反權力集團に換骨奪胎する方途を用いたのであらう。紅蓮教は紅教であり、それがそのまま哥老會であつた、という議論をさきに述べたが、前引の同治『劉陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難が、「大率、逆首は黃教を以て愚民を羈ぎ、劫説を佈浩して相い震わす。而して、紅・白は乃ち亡命を聚めて、亂の計をなす。黃教は初め茹齋するも、後、悉く酒肉に鑿く」といい、「初め、黃教の吃齋を以て、人を誘いて教に入れ、繼いで、白教の神を以て、其の術もて人をして信從せしめ、而して後、紅教の劫殺凶悍を合して、以て亂をなすなり」と同治『贛州府志』卷三三、武事の同治一二年七月條が述べることは、祕密宗教セクトから會黨へ、という圖式の一つのパターンを示すものである。なお、紅教と一體であつた黃教・白教もまた、究極において哥老會に繋がるものであつたことは、いうまでもない。

劫説にひきずられて宗教セクトに入教した人々の動機は、さきにみたように、治病とか貪利とかであつた。しかし哥老

會側は、「各省の招募せる勇丁は、營に在るの日類多なれば、盟を結びて拜會し、生死を共にせんと誓う。陣に上り賊を撃つに期りては、力を協わせ、心を同じくすること、乃ち久しきを歴て習い慣れ、裁撤の後も、仍お復た勾結して往來す」と表記される人々を構成の部分に抱えた集團であり、その故にまさに「其の徒衆、復た多く戰鬪に習れ、殺人・放火も、視て故常となす」であつたから、即物的希求をもつてこれに接近した人々を自己の側に有利に改變することは容易であつたろうし、さらに、いわば軍事的武力行動とその訓練においては、こうした會黨などへの對應策として郷紳層によって新たに結成されてくる團練などに勝る力をもっていたのである。だからこそこれらは、「従前の各種の教匪に較ぶるに、尤も制し難しとなす」と警戒されもしたのである。

免劫を材料とした結社加入の呼びかけは、その結社が反官憲的・秘密的なものであつたとしても、暴力的直接行動を前面にみせない點で民衆にうけいれられやすい。哥老會などの會黨が宗教を表面に置いた背景のもう一つに、宗教のもつ必ずしも反権力的にはみえない性格、免劫のための自己犠牲への人々の憧憬にも似た心情などをかれらが利用しようとした點、を擧げることができる。同治『瀏陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難が同治六年冬の事件を記し、被逮捕者に對する訊問のことを述べたなかで、「之を鞠するに、自ら言う、黃教を奉ずれば亂をなさずして、其の罪を許貰せらるとて、以て之を誘うなり、と。聞ま、其の實を吐するなり」とあることは、この考察を支えてくれるであらう。元末の白蓮教の成立以來、しだいに反権力的言動の度合いを深めてきた秘密宗教の諸セクトは、一九世紀にいたつて、漸く政治的反権力行動への傾斜を深めたのである。但し、いままでの行論においてすでに感ぜられるように、秘密宗教セクト、ないし秘密宗教の教理が會黨などの隠れ蓐として位置づけられていた、とみられる傾向が強いが、果してそうであつたのか、そうでないとすればどう考えるべきなのか。こうした諸點については、後日に期することにした。

同治六年前後に、江西・湖南の交界の地方、即ち袁北・湘北のいくつかの州縣にまたがって活動した紅蓮教セクトは、實はその前驅的セクトを探し出すことが難しい。劫説の流布、治病・免劫などの現世的利益の宣傳、上香・點燈・戒齋な

どの宗教的儀式の存在などは、従前の多くの宗教セクトにむしろ共通するといってもよいものであって、どの宗教セクトが紅蓮教に直接先行するものであるか、を特定することはできない。紅蓮教が經卷をもたないこと、その崇拜對象の神格を知り得ないことは、この困難の度合いをより増加させる。

同治『贛州府志』卷三三、武事の嘉慶一四年條に、「福建の紅蓮教匪廖善慶、信・會・安・龍・長・定の諸縣に傳徒したれば、匪黨蜂聚す」と、福建省に紅蓮教の存在したことが伝えられる。この記録の依據となつた同治『安遠縣志』卷五之二、武事は、やや詳しい記載を残しているが、そこでは「洪蓮教」と記される。「紅」・「洪」ともに同音であるので字の異なりを氣にしくなくてもよいが、これらの記事に示される紅蓮教は、福建省から信豐・會昌・安遠・龍南・長寧・定南という贛州府内に傳播されたのであって、本稿で考察を加えてきた紅蓮教の活躍地盤とは、江西省内において地理的な對極に存在したものである。地理的に對極であるから連繋の可能性がない、というのではないが、嘉慶年間の贛南の紅蓮教と同治年間の袁北のそれとの間の脈絡を示唆する記録も、皆無である。したがって、嘉慶期贛南の紅蓮教を同治期袁北の紅蓮教の先驅と定めることは、いまはできない。

同治期袁北の紅蓮教の先驅を特定することはできないが、後世への繋がりとは考えられる。即ち、それが紅教の別稱であつたこと、紅教は黃教・白教と一體のセクトで、ときに紅白黃教とも呼ばれ、紅教はそのうちで最も武力的に突出した部分であつたこと、この部分は宗教集團というよりも、むしろ武力集團そのものであつたこと、などはすでに明らかであるとしてよい。そしてこの部分は、嘉慶白蓮教の運動や太平天国の運動の周邊から派生してきた裁革の勇丁や、それに類する「亡命」・「遊惰」のものを抱き込もうとした哥老會の本質的部分と、重なり合うのである。こうして、紅蓮教は哥老會の構成要素の重要な部分をその形成過程の最終段階において擔い、そこに繼承させていった。そして、袁北・湖北に根據をおき、活躍した反權力集團は、ほぼ四〇年後の光緒三二年一〇月、同盟會會員の指導の下に、中華民國を呼號して⁶⁴⁾ いわゆる萍瀏醴起義を企て、辛亥革命への道を拓り開く重要な一石を投ずることになるのである。

おわりに

數箇の州・縣にまたがって、リーダーシップを握る數人のものによって、中央政府の行政單位ごとに宗教的セクトを營み、免劫の宣傳と護符の販賣とを通じて、地方鄉民や「亡命」やのセクトへの編成化と歛錢とを行なうことを最も初期的な活動として、哥老會のそれは始まった。それぞれの州・縣の宗教セクトは、恐らく相互に連絡性に乏しく、頂點にいるリーダーによってのみ連繫していたであらう。「或いは合し或いは分れ、忽ち散じ忽ち聚り」という表現は、こうした情況を背景としたときの行動形態の表現であらうし、官憲の彈壓をうけても、リーダーはつねに「逸犯」であり「在逃」であつたことも、そうした情況があつてはじめて可能なことであつた。初期の哥老會は從來から存在していた鄉村内部の農民や民衆の組織を基礎として組織形成をはかつたとも考えられるが、同治期の袁北・湘北地方においては、哥老會が鄉村民衆をとりこみやすい形の宗教セクトを媒體とすることによってそれを行なつた、と考えられる事例が多い。本稿でいえば、義寧州の李觀芬・朱以洸のセクト、瀏陽縣の姜本致のセクト、奉新縣の羅克柏・張大樹のセクト、新昌縣の楊長受・劉洸明のセクト、萬載縣の劉忠潰のセクトなどがそれである。さらにいうならば、これらの宗教セクトは、それが形成されたそれぞれの地域における特殊性を負つていた、といつてもよいかも知れない。劉岷が湖南省哥老會の別名としてあげる多くの教・會を、かれは「皆な白蓮の餘習を踵ぐ」というものの、實はそれらは必ずしも白蓮教のみに限らず、羅教や青蓮教や拜上帝教やその他の宗教の信仰要素がそれぞれに濃淡をもつて混入した結果の異稱であつた、と判斷してよい。そうでなければ、先づ宗教セクトとして鄉村の民衆を動員・組織するという、同治年間の袁北・湘北の哥老會の組織原理が動かなくなるからである。

宗教的に擬裝を施された集團は、やがて段階を追つてより武力的な行動をめざす集團への轉換を試みる。傳統的教學に沿つたかにみえる、したがつて親權力的にみえる宗教的組織は、恐らくそれと併存、ないし混在したであらう軍事的組織

に、民衆掌握という立場と地位とを譲っていく。但し、この場合にも、組織の單位に與えられる名稱に、宗教的片彩を残存させることを忘れない。

哥老會の組織原理を以上のように考察した場合、紅蓮教がそこで擔う役割は次のようになる。即ち、袁北・湘北の哥老會の形成過程における最終の段階、いわば哥老會としての實を表現する一步手前の組織形態として、紅蓮教はあつたと。哥老會と表裏一體の姿をもつ紅蓮教は、それが内實的にはともかくとして、外面的・表面的には宗教の體裁をもっているという事實は、哥老會の勢力を溫存し、成長させるための原動力たり得た、と解されるのである。

それにしても、同時代に湖南省に責任を負つた劉岷と江西省に職責をもつた劉坤一との間には、同じ事件、同じ事象を、前者はむしろ會黨の動きとして把握し、後者はむしろ秘密宗教セクトの活動として捕捉するという差異がある。この差異の生ずる理由はさまざまに考えられようが、自論にひきつけていえば、前述來の哥老會形成期における會黨・宗教セクトという二面性に關連する、ということが出来る。哥老會ははじめ湘勇のなかに組織され、ついで他省に及んだとされるが、この議論を踏まえれば、同じ時點においては、湖南省は哥老會形成に關して先進的であり、それだけに、より強く會黨的側面が突出していたであらうし、江西省はそこに鄰接するとはいへ、そのことに關して後進的であつたから、宗教セクトとしての側面がより強く露呈されていた、とも考えることができるのである。

本稿に觸れた諸事件に絡んで逮捕された多くの人々の姓名をみると、たとえば義寧州の事件における李觀芬・李吉芬・李炳芬のように、あるいは帥世江・帥世湖のように、同族・同輩ではないかと疑うに足る姓名の所有者をみいだすことができる。狭い地域の短い期間のことであるから、同族・同輩のものが、多くそれに絡まつたとしても不思議ではない。しかし他方、これらが本姓本名であつたとは、必ずしもいえない。また、たとえば上高縣の黃新發、萬載縣の黃多發・邱啓發、奉新縣の王義發、義寧州の謝景發のように、所屬縣を異にし、姓を異にする場合にも、同様の傾向がみられる。そして、舊いタイプの秘密宗教セクトには、しばしばこれに類似的の命名法が存在し、それは同志的結束の堅さを示すための行

爲であった。紅蓮教の場合も偽名ではなしにこうした命名法が存在し、しかもそれが初期哥老會に尾をひいていることは、哥老會の性格を考える上で重要なことである。

註

- (1) 市古宙三「朱九濤考」(『東方學』三、一九五二年。のち『近代中國の政治と社會』東京大學出版會、一九七一年に收録)。
- (2) 小島晉治「太平天国と農民」(中)の一・二(『史潮』九六・九七、一九六六年。のち『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、一九七八年に收録)。
- (3) 淺井紀「道光青蓮教案について」(『東海史學』一一、一九七七年)。
- (4) 野口鐵郎「清末江西の紅白黃教」(『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集——』國書刊行會、一九八二年) 參照。
- (5) 野口鐵郎「真空教と無爲教——または廖祖經と羅祖經——」(『歴史人類』九、一九八〇年) 參照。
- (6) 劉坤一『劉忠誠公遺集』(『近代中國史料叢刊』第二六輯所收、以下同じ) 奏疏卷四所收。以下「義甯片」と略記する。
- (7) 劉坤一『劉忠誠公遺集』奏疏卷四所收。以下「瀏陽摺」と略記する。
- (8) 同治『萬載縣志』卷一四、武事が、同治六年五月條に「上高教匪黃啓生等謀亂」と記し、さらに「先是四月間、上高井頭黃啓生等、以符籙惑衆、刑牲誓衆、僭號嗣統、潛鈎通瀏匪、欲藉我邑。四月十八日、賽神起事、……擒啓生、送府伏誅、并查獲匪黨十一名、置之獄」と記すことによつて「瀏陽摺」の記述を補った。但し、「瀏陽摺」では、黃啓生は萬載縣で捕えられたと記され、黃石秀・胡附子は入教してはいるが「並未爲匪」とされ、黃新發は「並未入教」とされている。また、同治九年序の『重修上高縣志』は、卷四、兵衛志、武事に、知縣王維新が「募勇防堵」したと同治六年五月條に記すのみで、同治六年四月の上高縣における紅蓮教の事件には觸れていない。
- (9) 同治『萬載縣志』には、この事件について記すところがない。
- (10) 同治『萬載縣志』卷一四、武事は、この事件の瀏陽縣における初動を五月七日、萬載縣への逃入を同一日と記し、その首謀者を姜本志と記す。しかし、「瀏陽摺」は萬載縣への逃入を一〇日とし、首謀のひとりに姜本致の名をあげる。また、同治『袁州府志』卷五、武備、武事は、「同治六年丁卯五月初七日、瀏陽齋匪姜本志等、糾黨二百餘人、於達潯地方倡亂。初九日、竄萬載仙源」と、前二史料と異なつた日附を記す。なお、「志」と「致」とは普通である。
- (11) 劉坤一の「瀏陽摺」に依據した『大清穆宗實錄』の記録は、

卷二〇六、同治六年六月庚子條にみえる。

(12) 劉岷『劉中丞奏稿』（『近代中國史料叢刊』第一輯所收、以下同じ）卷二所收。以下、「瀏陽醴陵摺」と略記する。なお、劉岷の奏摺などの日附は、『劉中丞奏稿』目録に記されたものによる。

(13) 『大清穆宗實錄』卷二〇五、同治六年六月癸未朔條には、「近來、湖南各屬哥老會匪、到處煽誘、潛伏未動、隱患甚深」とい、別に、「瀏陽股匪、現竄江西萬載縣交界之富溪小洞嶺」と記す。

(14) 「瀏陽摺」に、「臣查閱徽到偽印、與義甯一案相同。而偽示尤爲悖逆、其爲同夥無疑。且萬載・上高、復有義甯逃犯楊煥章等誘人入教」とある。

(15) 劉坤一『劉忠誠公遺集』公牘卷二所收。以下、「紅白黃教諭」と略記する。

(16) 劉坤一『劉忠誠公遺集』奏疏卷四所收。以下、「奉新片」と記す。これには日附を缺いているが、劉岷『劉中丞奏稿』卷三に載せる「查辦瀏陽醴陵會匪摺」（以下、「瀏陽醴陵摺」と略記する）に、劉岷が同治七年三月一日附で奉じた上諭中に、劉坤一による奉新縣の事件に關する報告のあった旨が記されている、と述べるので、このことから、「奉新片」の下限の時期を割り出すことができる。奉新縣の事件のことは、劉坤一『劉忠誠公遺集』奏疏卷四が同治七年六月二日附で載せる「整獲奉新等縣齋匪教匪分別懲辦摺」（以下、「齋匪教匪摺」と略記する）にも述べられる。なお、『大清穆宗實錄』では、卷二二六、同治七年三月己酉朔條に、この事件が記される。

(17) 『大清穆宗實錄』は、卷二二六、同治七年三月己酉朔條に、この事件を記録する。

(18) 劉岷は「瀏陽醴陵摺」においてのみ、曾軀材と記す。

(19) 同治「瀏陽縣志」と同治「萬載縣志」とのみが、かれの名に「國」字を用いる。

(20) 劉岷『劉中丞奏稿』卷四所收。以下、「瀏陽懲辦片」と略記する。

(21) 劉坤一『劉忠誠公遺集』奏疏卷六所收。以下、「新昌摺」と略記する。

(22) この事件を載せる同治「新昌縣志」卷八、戎政志、團練始末は、農勇を督帶してことに當った効果をのみ強調して、事件自體の記載はとくにない。また、『大清穆宗實錄』卷二八七、同治九年七月壬辰條に、劉坤一の摺に基づく記事がある。

(23) これらのうちのだれが義寧州人であるかは、文脈上からは把握し難い。

(24) 喻松青「清茶門考析」（一九八〇年、天津南開大學主催の明清史國際學術討論會における口頭發表。のち『明清史國際學術討論會論文集』天津人民出版社、一九八二年に收録）。なお、清茶門教については、淺井紀「明清時代における聞香教と清茶門教——漳州石佛口王氏の系譜——」（鈴木中正編『千年王國の民衆運動の研究——中國・東南アジアにおける——』東京大學出版會、一九八二年）参照。

(25) それは「義甯片」に、次のように記される。「李觀芬、腦後並排生兩黑痣、日漸長大、衆人謂是貴相。李觀芬遂挾稱得有兵書・寶劍、四處煽惑。仁・義・信三號匪黨、即奉李觀芬爲主」

と。

26) 同治『瀏陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難は、紅蓮教とともに哥老會を構成していると考えられる黄教について、「以黄教騙愚民、佈浩劫說相震」という。

27) 同治『瀏陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難は、同治六年五月の瀏陽・萬載の兩縣の事件を記して、その訊問の一節に、「詢其說云、避劫。察之、若漁利者所爲」という。

28) 「奉新片」が記す彭志禮などの場合にみられる。

29) 「齊匪教匪摺」が記す鍾日星などの場合にみられる。

30) この青蓮教の事件については、『大清宣宗實錄』卷一三七、道光八年六月己丑條・同卷一三九、道光八年七月甲子條などに記録がある。なお、淺井紀「道光青蓮教案について」(前掲)参照。

31) 「義甯片」によれば、仁字號「正帥」は帥正江、義字號「正帥」は賴青雲、信字號「正帥」は姚富常であり、二人の「將軍」とは陳惟堯・馬廉本である。

32) 「奉新片」によれば、「將軍」は張繼生、「提督糧官」は王義發である。

33) 野口鐵郎「清末江西の紅白黄教」(前掲)。

34) 營については、屈大均『廣東新語』卷七、盜の項に粵の「山盜」の營に關する記述があるが、康熙年間の廣東の用語が同治年間の湖南省の紅蓮教組織のそれにも有効であるか否かは、遽かにはわからない。しかし、軍事行動の據點、ないし單位としての意味では、少くとも同系の名辭として理解してよからう。

35) 鈴木中正『中國史における革命と宗教』(東京大學出版會、

一九七四年)二一六ページ。

36) 註2にも記したように、特定人物を特定州縣に原籍があったとすることは、必ずしもできない。

37) その同治六年十二月條に、「又有義寧教匪曾國才等、暗糾瀏陽張亦貴・上高黃發香・宜春吳元蘭等、在宜春山坑冲陳仙人掌、假敬神名色、往來勾結、將於瀏・萬交界之晏光洞起事」とある。

38) 野口鐵郎「清末江西の紅白黄教」(前掲)。また、劉岷の「瀏陽懲辦片」も、「據代理瀏陽縣知縣錢紹文訊問、曾國才供認、入教爲匪、總理黃紅白三教十五營外、得授爲職等情」という。

39) さきに、黄教は劫說を佈浩する、と述べた史料を示したが、同じ同治『瀏陽縣志』卷一三、兵防、土匪之難は、さらに「而紅・白、乃聚亡命、爲亂計」と續ける。

40) 劉岷の「請飭在籍大員幫辦團防摺」(劉岷『劉中丞奏稿』卷二所收。以下、「團防摺」と略記する)に、「臣詳查卷宗、細加考究、哥弟會之起、始於四川、流於貴州、漸及於湖南、以及於東南各省。向來湖南會匪、名目不一。如添弟・串子・紅教・黄教・白教・道教・佛教・及青龍・白虎等會類、皆隲白蓮之餘習。託免劫以爲詞、或合或分、忽散忽聚。其蓄謀思逞、本不亞於廣西」という。

41) 酒井忠夫「現代中國の秘密結社(幫會)」(『近代中國研究』好學社、一九四八年)一四一ページ。

42) 同治『萬載縣志』卷一四、武事の同治六年十二月條に續けて、「捕殺十餘人、生擒張亦貴七名、解郡梟示」とある。なお、「亦」は「以」に音通である。

(43) 「瀏陽懲辦片」に、「臣查、曾幟才・黃發香二犯、乃會匪渠魁、學次、在江・楚地方、糾衆稱亂」という。

(44) 酒井忠夫「清末の會黨と民衆——特に哥老會について——」『歴史教育』一三一・一二、一九六五年・渡邊惇「清末哥老會の成立——一八九一年長江流域起事計畫の背景——」(『近代中國農村社會史研究——東洋史學論集8——』大安、一九六七年)など参照。

(45) 「團防摺」に、「軍興十餘年、湖南兵勇、徧布各省。其在營者、往往與同營同哨之人、結爲弟兄、誓同生死。當時頗資其力、浸淫既久、一二狡黠之徒、因而煽結。於是、哥弟會之黨以衆、而其勢亦遂愈張」と述べられる。

(46) 同治「贛州府志」卷三三、武事は、咸豐二年一月に贛縣におこった「奸民」郭老六・張隆・吳羅羅などの事件を記し、郭老六などが同治七年から九年にかけて「不軌」を謀ったことを述べるが、そのなかでこれらの來歴に關連して、「自粵匪之滅也、漏網者多、以習教爲名。有哥老・添弟・三點會等各目。入者飲鷄頭、飲血酒爲誓」と述べ、太平天国の運動に従事したもののなかにも、それに敵對したものなかにみられたと同様に、會黨形成への動きがあったことを傳える。

(47) 『大清穆宗實錄』卷二二一、同治六年九月壬子條が左宗棠の奏に依據して、「近年、哥老會匪、結盟聚黨。凡官軍駐紮處所、潛隨誘煽、江・楚・黔・蜀、所在皆有、陝・甘尤熾。竟有軍營武職人員、保至三三品者、公然入會。誓不畏法、殊可詫異」ということも、同治六年前後の哥老會の動靜を説明したものである。

(48) 同治「醴陵縣志」卷六、武備、兵事に、「(同治)六年十一月二十六七日、復有哥弟會匪之案……」とある。

(49) 同治「醴陵縣志」卷六、武備、兵事に、「(同治)九年秋、哥匪仍蠢動於湘潭之朱亭・淦田。其地界邑西南隅……」とあり、同治「萍鄉縣志」卷五、武備、武事に、「(同治)九年九月、湖南會匪、倡亂嘯聚攸・醴交界處、逼萍境」とある。なお、この事件に關しては、劉坤一「劉忠誠公遺集」奏疏卷六に、「湖南會匪滋事調派兵勇分投堵剿摺」・「湖南會剿撲滅江境防師分別撤留片」の二つの報告がある。

(50) 「團防摺」。

(51) 「瀏陽齊匪摺」。

(52) 「團防摺」。

(53) 「團防摺」。

(54) 中村義「辛亥革命の諸前提——とくに湖南を中心として——」『歴史學研究』一八八、一九五五年。のち『辛亥革命史研究』未來社、一九七九年に收録・清水稔「萍瀏醴における革命蜂起について——洪江會を中心として——」(『東洋史研究』二九・四、一九七一年)、及び中村義「前掲書」第四章第一節など参照。

(55) 本稿の場合、それは曾幟才であり、楊煥章であった。

(56) 酒井忠夫「清末の會黨と民衆」(前掲)参照。ここにある「鄉村内部の農民や民衆の組織」という概念には、秘密宗教セクトのような組織も含まれるであろう。

(57) 王天獎「十九世紀下半紀中國的秘密會社」(『歴史研究』一九六三・一二、一九六三年)。

THE HONGLIAN (RED LOTUS) SECT 紅蓮教 AND THE GELAO SOCIETY 哥老會

NOGUCHI Tetsurō

The Honglian sect as a mystical religion flourished in some districts situated on the boundary between Jiangxi 江西 and Hunan 湖南 provinces. They had no basic scriptures, and nature of the deities they worshipped is unknown. But they made propaganda of their secular benefit such as healing the sick, sold protective charms against apocalyptic disasters and practiced abstinence from meat. However, it also becomes clear from the information transmitted that rather than being a mere religious sect, the group was very active militarily, agitating the masses, attacking the gentry and the rich of the area, and posing a serious threat to the cities of the provinces and the districts. For these reasons, one local official considered them as a religious sect, another, however, the then newly emerging Gelao society.

The Honglian sect was also called Hongjiao (Red sect) 紅教. The concept of imminent apocalyptic disasters, which they took over from the so-called Huangjiao (Yellow Sect) 黃教, was used in a very effective way to win followers. The Honglian sect gained strong momentum for its formation from the unrest of the discharged militia directly after the *Taiping* rebellion. 太平天国

The head of the Honglian sect was at the same time the leader of the Gelao society, which shows that both were actually only different names for one and the same group. It had a hierarchical organization for military activities as well as for religious activities. And its character of strict secrecy can be observed in the fact that the units of these two organizations were connected each other only by the elite consisting of its few members.

Securing followers as a religion by promising the end of all political unrest, the sect was gradually transformed into a group concentrating on military action. Thus the Honglian sect did in fact merely represent one step in the process of the formation of the Gelao society.